
生き返って平和に過ごせ……ない

タマゴパック

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

生き返って平和に過ごせ……ない

【Nコード】

N8785P

【作者名】

タマゴパック

【あらすじ】

メチャクチャ不幸な人生を過ごしていた青年はある日、車に轢かれそうになったお爺さんを助けて死んでしまう。

第一話（前書き）

投稿）

第一話

「…何処だここ？」

目を覚ますと、俺は一面真っ白い空間にいた。周りを見渡しても何も無い白だけの世界。

「確か、車に轢かれそうになった爺さんを助けて、代りに俺が轢かれたんだっけ……ってことは、俺は死んだのか…」

やっと碌でもない人生が終わったか…あ、一つだけいい事あったな。

「それにしても、ここは天国なのかな？」

「違うぞ」

突然後ろから声がしたので振り向くと、俺が助けた爺さんがいた。

「ここは生と死の狭間にある世界じゃよ」

生と死の狭間の世界だと！？それに何で爺さんがこんな所にいるんだ？

「それは、儂が神だからじゃよ」

ぬお！心を読まれたのか…。スゲエな、神様って読心術使えるのか

……

「つて神！？あの神のことか！？」

「どの神の事を言っておるのか分からんが、まあ人間達が崇める神じゃ」

マジか、助けた爺さんが神様だったなんてな。つーか何であんな所にいたんだ？

…まあいいか、もうどうでもいいしな。

「それで、神様が俺に何の用だ？」

「儂のせいでお前さんを死なせてしまったからのう、詫びとしてはなんじゃがお前さんに新しい人生を与えようと思つとる」

新しい人生だと！？

「新しい人生ってことは、俺は生き返られるのか！？」

「そうじゃ、じゃが前の世界では生き返れないぞ？」

「前の世界なんかどうでもいいさ」

思い出すだけで涙が出る、恵まれない最悪な人生だったからな。

「そうか、それで転生させる前に何かしてほしいことはないかのう？」

「それじゃ前の世界で得た知識以外の記憶を消しておいてくれ」

「了解した。それじゃ早速始めるぞ」

新しい人生か：一応前みたいにならない様に祈っておくか

「それでは、お主の幸福を祈っとるぞ」

その言葉を最後に、俺は意識を失った。

「ふむ、うまく転生出来たようじゃな」

あの若者の人生を見てみたが、何ともまあとてつもない人生じゃったな。あんな事があってよく善人でいられたのう。

「そうじゃ！あの者に力を与えておこう」

人界で読んだマンガに面白そうなのがあったからのゝ

「適当に選んだ世界に転生せたから、あっても困らんじやろう」

一応手紙を送っておくか

第二話（前書き）

投稿です

やっぱり書くの難しいです

第二話

こんにちわ(?)、新しい世界に転生した、九条樹くじょういつきです。

え? 飛んでる? 気にすんな。

俺は今、日本最大級と言われている学園都市、麻帆良学園という所の中にある一軒の居酒屋にいる。

何でそんなところに居るかって?

それは、俺が一人で日本全国を旅してたが、旅を始めて約7ヵ月、金が尽きそうになってしまった。

どうしようかと考えてた時、ちょうど埼玉県にいたので、前に親戚のおじさんが麻帆良で居酒屋をやると言うのを思い出していた。そして、おじさんの所に行き、頼んで働かせてもらっている。

居酒屋なので、夜になると仕事帰りの人達が大量に来る。

客の半分以上がこの教職員の方々だ。いつも、今日あった事や、愚痴や悩みなどといった話を聞いてあげている。

この学園生徒達は、かなりハイテンションだから先生方もかなり大変そうだ。

ここの生徒のテンションもそうだが、学園の中心にある巨大な木、確か世界樹とっていたな。本当にあれにはかなりビックリした。

他にも、図書館島と言う島一つが図書館になっている。どの位の本があるのだろうか？

あ、そう言えば7歳の時、俺を転生させた神様から手紙が来ていた。

内容は、『つまらないから、お主に能力を与えよう』と書いてあった。

つまらないからと言う意味を考えていたら、急激に酷い頭痛に襲われた。頭の中に能力の情報、使い方や、動き方戦い方などが流れ込んでくる。

その時俺は、あまりの痛さに意識を失った。

目が覚めたのは、3日後の事で母親が泣きながら抱きついてきたのを今でも覚えている。

実際平和で争い事なんか無い日本なのに、こんな能力持ってどうすんだよ。あの神様は何を考えているんだ？

※一応能力使って訓練した。あれはチートだね。

「おゝい樹ゝ居るかゝ？」

「いますよゝ」

昔の事を思い返していたら、親戚の佐藤大智さんが下から声を掛け
てきた。

「もう直ぐで開店する時間だから、仕度して暖簾上げてきてくれ」

「あ、はい分かりました」

おっと、もうそんな時間だったのか。

今日も頑張りますか！

暖簾を上げてから約4時間が経った。

営業は午後5時半からなので、今8時半位だ。徐々に仕事帰りの人
達が店にやって来る。

お、また来たみたいだ。

「あ、新田さんじゃないですか、いらっしやいッス」

「今晚は九条君」

彼は、初めて俺が麻帆良学園に来た時、道に迷ってた俺に声を掛けてくれ、道案内までしてくれた人だ。それが切っ掛けで親しくなり、今では良く店に飲みに来てくれる。

「今日は一人ですか？」

「いや、瀬流彦君も来ているよ」

と言った後、若い優男が入ってきた。

「やあ、今晚は九条」

「よう、いらっしやい瀬流彦」

瀬流彦は新田さんと良く飲みに来る。

因みに、瀬流彦の方が歳上だが、本人が『歳も近いし堅苦しいのは好きじゃないから呼び捨てで良いよ』って言ってたので呼び捨てにしている。

「何にします？」

「そうだな…じゃあ焼き鳥とビールで」

「僕も同じのを」

「了解しました」

注文を受け厨房に戻って調理を始める。

調理中

「お待ちどうさん」

出来あがった料理を持って来た時、2人で何か話してたのか新田さんが深い溜め息を吐いていた。

「どうしたんです？溜め息なんか吐いて」

「実はね、女子中等部2年にもの凄くにぎやかなクラスがあるんだ」と瀬流彦が言った後

「注意しても直ぐに騒ぎ始めるし、何かと問題も起こす、もう大変だよ」

と続けて新田さんが話すと、また溜め息を吐いた。

そう言えば、数ヶ月前にも同じような事言ってたな…まあいいか。

「本当に大変そうですね」

「全くだ、あんな騒がしいクラスは、教師人生初めてだ」

呆れた様な顔をし、ビールを一気に飲んだ。瀬流彦は隣で苦笑していた。

「一回見て見たいなそのクラス」

「ハハハ、多分九条でもあのテンションは圧倒されるよ」

その後も、新田さんの愚痴聞いて、瀬流彦と雑談をしていた。

もちろん仕事はしてたよ

主人公設定（前書き）

設定です

少し編集しました。

主人公設定

名前.. 九条樹くじょういつぎ

年齢.. 18

身長.. 177 cm

性別.. 男

容姿.. 茶眼黒髪で顔はそこら辺にいる平凡な顔。(微イケメン?)

魔力.. 普通

気.. 普通の人の約2倍

チャクラ.. メチャクチャ多い

能力

輪廻眼.. 使用者は全ての性質変化を操ることが可能であるほか、修羅道、畜生道、餓鬼道、天道、人間道、地獄道、外道の七つの能力を使いこなせる。

使用時に眼が紫色に波紋の模様になる。

武術

暗殺拳「刃」^{やいば}…小さい頃、祖父に教わった拳法。拳ではなく手刀で戦う。

棒術…前の世界で護身術程度しか習っていなかったが、転生した世界で祖父に更に鍛えてもらった。

道具

起爆粘土（両手の平にある口で様々な造形品を作る）

六角棒（六角形の約2mの鉄棒）

第三話だよ完成（前書き）

ごめんなさい、かなり開いてしまいました。

第三話だよ完成

俺は今…何故か……

動けない!!

そして、後ろからは、金髪の少女が不気味な笑みを浮かべながら、
少しずつこっちに近づいてくる。

何だこの状況は!?

数時間前

「ヘップシッ!」

あゝ鼻水が止まんねえし、目も少し痒い。このままじゃ仕事しずれえな。

「あら、どうしたの? さっきからくしゃみばかりして、もしかして風邪?」

と声を掛けてきたのは、大智さんの奥さん、佐藤奈緒子さんだ。

「ズズッ…いや、花粉症ですよ」

今年の花粉は、例年よりかなり多くの花粉が舞ってるので、俺は初めて花粉症になってしまった。

「ヘップシユ!…ズズッ、花粉症の薬とかって、あります?」

「残念だけど、無いわ。家は誰も花粉症になったことないのよ」

うーん、どうすっかな、もうこの時間じゃ病院は開いて無いしな。

…コンビニ行ってくるか。

「奈緒子さん、今日はもう上がっていいですか? 仕事にならないんで、薬買ってきます」

「いいわよ、丁度バイトの子も来たし、そののままやっても辛いし

ね」

と、許可を貰ったので、部屋に戻って着替えてから、コンビニに向かった。

いや、最近のコンビニは薬が充実してるな。

そんな事を思いながらコンビニを出て、夜道を歩いていると、ちょっと離れたところに、ピンク色に明るくなっているのが目に入った。

何だあれ？

ん、あの辺りは確か…桜通りがある所だっけか？

そういえば、今年はまだ一回も花見に行ってなかったな。

「ちょっと行ってみるか」

桜通り、桜並木が街灯に照らされて、凄い綺麗な光景になっていた。

「うは、凄い綺麗だな、来てみて正解だぜ」

これで、桜の花弁散ってれば、更に凄い景色になってただろうな。
5月になったら、ゆっくりと花見しに来るか。

「ん？」

しばらく桜を見ながら歩いてると、桜の木の下に金髪の少女がいた。
携帯で時間を確認すると、9時半になってた。

小学生位かな、こんな時間に1人でどうしたんだろう？ 親とはぐれたのかな？

ちょっと声掛けてみるか。

「こんばんは、嬢ちゃん。こんな時間にどうしたんだい？」

「何だ貴様は？」

警戒してるな、いきなり声を掛けたんだから当り前か。

「いや、君みたいな小さい女の子が、こんな時間に1人でいるから迷子かと思ってね」

「な！？ ま、迷子だと！…この私にむかってふざけたことを…それ…子供扱いまで…」

ど、どうしたんだろう？ 突然プルプル震えだして、それに下向いて何かつぶやいてるし。

俺の気のせいかな、この子からドス黒いオーラが見えるのは…。

それにしても、この子の威圧感とんでもないな。これじゃ誰も近づくにしろ、俺帰っても大丈夫だろう。つか帰りたい！この子メチャクチャ怖いよ！

帰ろう。

「あゝ…何か大丈夫そうだから…俺帰るね…じゃ！」

ふう、何とか離脱。

あ、そういえば、今日あのドラマの日じゃん。ヤベツ、ダッシュで帰る

「!？」

な、何だ！急に…動けない。

くっ、首と腰しか動かさねえ…。

「私の事を知らないとはいえ、よくも私を虚仮にしてくれたな」

と、後ろから聞こえたので、首だけを動かして後ろを見ると、さっきの子がいた。

現在

「…嬢ちゃん、俺に何したんだ」

「なに、ただ動けなくしたただけだ」

何をするつもりだこの子……まさか、俺の財布を盗むつもりか？

「さて、貴様の血を吸わせてもらおう」

良かった金目当てじゃないのか、給料日まで少し危なかったんだよね。盗まれたら大変だったぜ。

まあ、それよりも

「血だと？」

「フツ、貴様には特別に教えてやろう、私は真祖の吸血鬼だ。だから、貴様の血をもらおうぞ」

そう言い、嬢ちゃんは唇を上げて歯を見せた。

本当だ、犬歯が犬や狼みたい鋭くになってる。あれで噛まれたら痛いだろうな。

……って、マズイじゃん！この子マジで吸血鬼なのかよ！？

「ククク、安心しろ、死なない程度にしてやるさ」

安心できねえよ！つか、この子、大量に吸う気だ！

クソ！何で動けねえんだ？

自分の体を見回してると、腕の近くで何かが小さく光った。
目を凝らして光った所を見てみると、

糸？

成る程、糸が体中に巻きついてるから動けないんか。

だが、あの嬢ちゃん、いつ俺の体に糸を巻きつけたんだ？

今はどうでもいいか。それよりも、あの嬢ちゃんをどうにかしなく
ちゃ。

再び後ろを見ると、もう直ぐそこまで来ていた。

ヤバッ！仕方がない、動けないからアレをやるしかねえな。ほんの
少しなら問題無いだろう。

俺は目をつぶり、1、2秒してから目を開けた。

目を開けた時、樹の目は茶色ではなく、紫色になり波紋の模様になっていた。

ほんの少し吹っ飛ばしてやる。

「■■■■」

と、俺は小さく呟いた。

「グッ!？」

音からして少し吹っ飛んだようだ。

「お、やっと動ける」

同時に糸の拘束もなくなった。

ふう〜ようやく解放されたぜ。あの嬢ちゃんが来る前にさっさと退散するか。

そう考えながら後ろを見ると、吹っ飛んだ筈の嬢ちゃんが、もう戻って来ていた。

「貴様…、私に何をした…」

殺気を出しながら睨んでくる。

「ハッ、企業秘密だ」

「そうか…ならば力尽くで聞くまでだ！」

そう言い、嬢ちゃんは懷からフラスコと試験管を取り出した。

何だあれ、フラスコか？ あんなので何をするつもりだ？

様子を見てると、フラスコと試験管を少し上に投げ、

「魔法の射手 連弾・氷の3矢！」

と、叫んだと同時に、フラスコと試験管に入ってい液が空中で混ざり、俺に向かって何かが飛んできた。

「！！クッ！」

俺は咄嗟に、横に跳んで回避した。

な、何だ今のは。ビームみたかったぞ！？

さっきまで俺が立っていた所を見ると、地面が凍っていた。

「ほう、いい反応だ。少し数を増やそう」

「魔法の射手 連弾・氷の7矢！」

氷の矢が樹に襲いかかるが、

「どわぁ!あぶねっ!」

辛うじて避けた。

今のは危なかった…、また数を増やされたら、多分避けらんねえな。

どうする…少し戦うか………いや、やめどこ。

それじゃ、さっさとここから逃げつか。ドラマ始まってそうだし。

だけど、どうやって逃げようかな……。

…あ、術使えばいいか。

最近使っていないからすっかり忘れてた。

「んじゃ、今度はこっちの番だ!」

「何?」

俺は、印を結び術を発動する。

「土遁・おとし蓋!」

「?何をしてr」

ドオオオン

瞬間、嬢ちゃんの真上に、人が3、4人位入れる大きさの蓋を、落として閉じ込めた。

「よし、成功！」

小さくガッツポーズをした。

「そんじゃ帰るか」

俺は急いで桜通りを出た。

あ、そういえば、あの大蓋放置してきちゃった。
どうしよう。

……大丈夫か、あの嬢ちゃん……いや、幼女がどうにかすんだろう。
ビームみたいの撃ってきたしな。

ケータイを出して時間を見ると、10時過ぎていた。

あゝあ、ドラマ始まってるじゃん。急がないと！

S i d e ロリ吸血鬼

ゴゴゴゴ

私の足元の辺りから街灯の光が射し込んできた。

「マスター、大丈夫ですか？」

「ああ、何ともない」

今日は、茶々丸を連れて来てきといてよかった。

「茶々丸、お前がここに来た時、周りに誰かいたか？」

「いえ、私が来た時は誰もいませんでした」

チツ、大蓋を落として直ぐ逃げたか。

：それにしても、奴が手を高速で動かして私を閉じ込めた大蓋を出
現させた術、魔法か？

：いや、奴どころか大蓋でさえ魔力を一切感じられなかった。

あの男いったい何者だ？

「どうかしました？」

「何でもない。茶々丸、私は先に帰る、その大蓋撤去しておけ」

「了解しました」

次会ったら、最初から全力で潰してやる。

第四話！（前書き）

日常編ってやつです！

第四話！

ピピピピッ！ピピピピッ！ピピピ

ドガッ！メリメリッ

「ふあああ」

体を起こしあくびをしながら大きく背を伸ばす。

「ふう…ねみい」

なんかダリィや

「今何時だ？……あ」

目覚まし時計を方を見ると、時計の上に付いていたはずのボタ
ンが中までめり込んでた。

「はあ…またやっちゃった、これで6個目か」

何故だか知らないが、たまに目覚まし時計を無意識に破壊する癖？
があるらしい。裏拳で。

大地さんの家に住むようになってからはまだ6個しか破壊してない
が、実家では50個ちかく破壊している。

何でかなあ？

とりあえず顔洗いに行くか。

「あら、おはよう樹君」

「おはようございます」

仕度をしてリビングに行くと、奈緒子さんが朝食の準備をしていた。

「さっき凄い音したけど、もしかして、また時計壊したの？」

「ええ、起きたら壊れてました…」

本当にどうにかなんないかねえ、アレ。

「相変わらず凄い怪力ね…、あ、お茶と牛乳どっちにする？」

「お茶でお願いします」

今日の朝食は、ごはん、みそ汁、鮭、漬物などシンプルな和食だ。

「「いただきます」」

うーん、やっぱり和食は美味しいね。

そういえば、昨日の大蓋どうなったんだろう？

足止めするとはいえ、術の選択間違えたなく、別のやつにすれば良かった。

変なことになってなきやいいけど。

朝飯食ったら桜通りちよつと見てくるか。

「あり？無くなってる」

昨夜ぶりに桜通りに来てみたが、大蓋は無くなっていた。

あのロリ吸血鬼が撤去してくれたのかな？
でも、流石にあの重量の蓋は持てないよなく、他に誰かいたのか？

「あれ？樹じゃないか」

いろいろ考えてると、後ろから声を掛けられた。

「お、瀬流彦。おはようさん」

「おはよう、散歩かい？」

「ああ、天気いいから久しぶりにな、そっちも散歩か？」

「いや、僕は「おーい、瀬流彦君」あ、ガンドルフィーニ先生」

「そっちは、どうだった？」

黒い肌の外国人の男性がこっちにやって来た。

「こっちも何もありませんでした」

「そうか…ん？樹君か、おはよう」

「おはようございます、ガンドルフィーニさん。そういえば、何かあったんですか？」

「ちょっと…な」

と言い顔を合わせる二人。

「何か訳有りって顔してますね」

「ああ…、でも学園側の問題だから気にすることはないよ」

そう言うが、何か気になるね。

「悪いね樹」

「まあ、いいさ。俺が出来ることがあれば手伝うから、そんな時は言えよ」

「うん、その気持ちは受け取っとくよ」

「瀬流彦君、そろそろ職員会議だ戻ろう」

「あ、はい。それじゃね樹」

二人は少し小走りで校舎に向かっていった。

瀬流彦とガンドルフィーニさんは、何調べてたんだ？

……まあいっつか、学校の問題って言ってたしな。

おっと、そろそろ大智さんが帰ってくる頃だな。

戻って仕込みの準備しないとね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8785p/>

生き返って平和に過ごせ……ない

2011年10月7日13時52分発行